

山梨大学 正会員 花岡 利幸

1. まえがき

国民の高所得化に伴い生活環境の質の向上への意識が高まり、公共施設のサービスやアメニティへの関心が高まっている。1970年代の自然保護論とは少し異なって、最近のそれは環境保全論・文化創造論の視点から公共空間・施設に対するさまざまな批評や告発がみられる(文献1)。

自然保護論とは開発か保護かが問題であったが、環境保全・文化創造論は人が手を加えて環境創造することであり、問題はそのことの中にある。本論では環境創造問題について若干の考察を行なう。

2. 二・三の実例

1) 中流河川の改修工事の例

これは中国地方の河川中流部における改修の例である。洪水・氾濫防止のために三面をコンクリートブロックで固めてしまった例である。周辺集落の住民は、かつてその川を生活の一部として使い、心の郷里と考えてきたのに、それが失われることの大きさを嘆いていた。治水に徹底し親水を犠牲にした例で住民は「洪水はなくなるが、人も住まなくなる」と述べた。最近、人口の多い都市河川では河川景観や親水に意を用いた工法が取られるようになりつつあるが、人口の少ない過疎地に当たる上流・中流河川の治水工事のあり方に注意を向ける必要があるのではないと思う。なぜなら、それは過疎化と都会人にとっての自然への接触機会の削減を促進しているように思われるからである。

2) 砂防ダムの建設計画の例

これは長野県の温泉とスキーで有名な観光地の裏山の小さな沢に高さ20mの砂防ダムを建設する計画の例である。何が問題かという、観光地であるこの村の地形スケールを破って背後の裏山に大きなコンクリートの壁が出来ることは村にとって困ったことであるというのである。「今までに洪水が起った経験がないのにどうしてこんな大きなダムを作らねばならないのか。工事をやるとしても、この小さな沢の砂防のために同じ効果を発揮する小規模な砂防ダムをいくつも設置するわけにはいかないか。」と

村人。「今年から、この方式に決まって変更は無理。洪水の危険がある。」と行政側。「村にとっては大きな予算がついたからやらねばならぬ。」という気持ちも強いらしい。

3) 用水路の改修工事の例

これは山梨県の温泉観光地の例である。中心地を流れる用水路の改修で、親水に意を用いた設計を加味した。しかし、その設計は粗雑であり、せっかくの親水計画意図がありながら、人々に親しまれない空間になってしまっている。「忙しくて時間がなかったので擬木業者のパンフレットにあったものをそのまま使った。」と係員は述べた。

3. 技術の環境破壊性について

従来の技術が安全性・経済性に優れているとしても、環境保全・文化創造論的視点に立てば、それらが役に立っていないばかりか環境破壊にもつながりかねないような事例に接する機会は益々増えている。それは、生活環境に関する公共空間・施設が人々の使用に供されるものであり、それらはサービスとアメニティを要求されるものであり、生活水準が上がると人々の目線の高さが上がって周囲環境への関心が高まるからだと考えられる。以下に、公共施設の計画・設計の段階で環境破壊の危険性のある局面の類形化を試みた。

- ①碌に設計をしないで手をつける例。
- ②現地を碌に見ないでマニュアル通りに設計する例。
- ③現地を見ても現地(地域)の特性や個性を考慮することなくマニュアル通りに設計する例。
- ④コンセプトが明確でない設計例。
- ⑤プロジェクト事業によって派生する周辺問題を考慮しないで、その施設だけを作ってしまう例。
- ⑥プロジェクト事業が構想・基本計画の線上にない例。構想・基本計画の軽視。
- ⑦構想・基本計画のない例。場当たり主義。

これらは、せっかくの環境創造時に、行政側や技術者側の配慮のなさや足りなさから環境破壊的なものにつながってしまう局面を、個々の施設設計から地域の計画にまたがる場面までの段階で示したもので

ある。

環境破壊の危険性に関して、その背後に存在する実態と注意を要すべき点は次の二点である。

ア) 現場を知らない技術者群

長さ、重さ、広さ、高さ、勾配などの実感覚や現寸論の実感覚の欠如した技術者群が増えている傾向。現象・実態を体得している職人がいなくなったこと。

イ) 土地利用変化の激動期

現在は、地方都市は国土の隅々に至るまで都市化の波に遭遇しており、農村的土地利用から都市的土地利用へと変化がめまぐるしい。そのことを、土地改変や空間・施設設計に携わる技術者が自覚することの必要性。すなわち、自然相手の技術者から人間相手の技術者に重点が移っていることの自覚。

4. 技術の没個性化・文化の不毛性について

地域の環境保全・文化創造の健全性が保たれるのは、ソフトな表現をすれば行政と住民のコミュニケーションがうまく行き、行政が住民を育て、住民が行政を育てる関係にあることであり、ハードな表現をとれば住民がしっかりと主張をすることであり行政と住民の間にクールで客観的な緊張関係の存在があることである。この関係は一般には行政への住民参加といわれることで、その健全な発展が必要不可欠であると思われる。しかし、ここではその周辺状況の問題点を本論の記述法に従いネガティブ面から整理してみる。

① 議論してまとめることの欠如

反対に神格化して金縛りにし、意思決定を他人に委ねる傾向。マニュアル化、画一化、中央集権化に通ずる。

② 日常性の中に専門性を発見すること、学問を尊ぶ風潮の欠如

反対に新しいものを1時的にうやうやしく迎える傾向。しかしやり方は前から決まってい、学び自己改革することがない。保守性、無改革性に通ずる。

③ 称える、祝福する精神の欠如

反対に足を引っばる傾向。同類を尊ばず、その中に新しいものの発見がなされない。どっぷりつかるとだめ。

④ ボランティア精神の欠如

反対に自己中心主義にならざるを得ないような社会になっている傾向。個人プレーが活かせる分野が

活気を帯びる。従って経済が優先する。

⑤ 公共性の欠如

反対にお上と下々の対立意識があって、自らは動かない他人のせいにする傾向。べき論が通用しない。

以上は「育てる育てられる」関係をはばむものとしてあげた項目で、地域発展の原動力をなす人材育成論として述べたものである。これら欠如項目とその項目ごとのコメントは反対概念を示し、前者がこれから向かう都市社会に必要な概念であると思われるのに対し、後者はわが国で長年に培われてきた農村的社会の概念であると思われる。

現在、わが国が直面している都市計画や地域計画の中心概念は「都市化」であり、それと対応した地域住民と行政の意識改革が待たれる。そして地域計画において地域プランナーの必要性（文献2）や草の根運動の重要性を述べたが、実際の環境はその存在が困難な状況にあるように思われる。

5. あとがき

自然の開発か保護かという自然保護論の盛んであった時代は容量論、自然保護論など難しい問題もあったが、数量的に解決できない部分もあって世論（素人）が尊重され、知識人の考え方（評論）などを参考にして観念的な議論で合意が形成されるところがあった。しかし、今日の環境保全・文化創造論になると問題がより具体化したところで発生しているので、専門化して素人が口をはさむ余地が少なくなっている。ところが、環境保全・文化創造論などの技術的分野にその道の専門家がいるかといえば、本当は自信のないところが現実の姿だと思われる。つまり、この分野に求められる専門家はGeneralなSpecialistであって、このような技術者は必要を認められながら、世の中には認知されていないのが現状である。それゆえ、どこかの段階で、このような技術者を誕生させその職能が発揮されるような職業が世の中に認知されることが必要だと思われる。

文献1：大前研一：「世界がみえる、日本がみえる」；講談社、1986

C.W ニコル：「どうかお願いだ」；世界、1986.9月号
文献2：花岡利幸他：「地域におけるコミュニティプランナーの育成に関する研究」；日本計画行政学会第3回全国大会、1980.11

花岡利幸：「地方都市におけるプランナー育成の試み」；第38回土木学会年次学術講演会、1983.9